

へき地複式校における発達障害児の早期発見及び専門的支援

事業代表者 宇都宮大学教職大学院・准教授・原田浩司

1. 事業の目的・意義

29年度は日光市のへき地複式校の中でも最も奥地に位置する湯西川小中学校を対象として実践研究を実施した。専門機関がないへき地には、発達障害が疑われても専門的なサポートがないため有効な指導が受けられない児童生徒が多数存在したが、大学との連携協力によって心理検査や専門的なアセスメント、指導法に関する教員研修をとおして専門的なサポートが可能になった。こうした支援の必要なへき地複式校は県内に46校存在する。30年度は、へき地複式校が県内で2番目に多い那須地区に研究実践の場を広げ、発達障害児への専門的支援を継続していきたい。調査には、教職大学院生に協力を依頼し参加を促す。

2. 研究方法（又は事業内容）

(1) 須賀川地区における実態調査

① 心理検査及び読み書きのアセスメント：

発達障害及びLD児の早期発見のための調査を実施する。

② 読書行動傾向調査：「読み書き」だけでなく「読解」に課題のある指導生徒が多いことから、視線追跡装置を搭載したパソコンを用いた調査を行い、音読・読解に関する傾向を分析し学校側に情報提供する。

(2) 職員への研修及びコンサルテーション

① 職員研修会の実施

発達障害についての基本的特徴と指導法について事業代表者が企画立案し実施した。

タイトル「少人数学級における指導と評価」

② 担任とのコンサルテーション

課題の大きい児童生徒に対する結果分析、課題の明確化、指導法の改善等についての助言を行った。

(3) 須賀川小学校と高齢者を含む地域とのサポート体制についての調査

へき地校の課題は学力だけでなく、地域の文化や伝統の継承の課題も大きい。須賀川地区では、少子化・高齢化の問題があり、後継者をどのように育成するかについて積極的に取り組んでいる。

今回は、地域の高齢者と子どもたちが学校教育の場を通じた活動について調査した。

3. 事業の進捗状況

(1) 須賀川小学校における実態調査

① 読み書きのアセスメント

発達障害の中でも一番多い読み書き障害のアセスメントを実施した。今回は「MIM：読みのアセスメント」「小学生の読み書きアセスメント」を使用した。

須賀川小学生全員に対して「読み」「書き」「算数」についてアセスメントを実施した結果、へき地以外の学校に比べて読み書きに課題の大きい児童の割合が大きいことが判明した。(文科省の調査結果6.5%よりも大きい公表は控える。)

この結果について、須賀川小学校の先生方と協議し、「職員研修会」「担任とのコンサルテーション」を実施することにした。現在、それを受けて、教師による指導が進行中である。授業の方法についても客観的なアセスメント結果に基づいた指導の工夫がなされている。

② 読書行動調査の実施

「読み書き」だけでなく「読解」に課題のある指導生徒が多いことから、視線追跡装置を搭載したパソコンを用いて全校児



童を対象に調査を実施した。

業理解に役立っている。

(2) 須賀川小学校における専門的支援

① 事例検討会の実施

発達障害児が実施した WISC-IV心理検査の解釈と教育的支援について助言した。今までは心理士がとった WISC-IV心理検査の説明を受けても詳細な理解ができずに終わっていたが、今回は教育にどのように活用していくかの視点から説明したので児童理解に役立つことができ、教員からの評価が高かった。

② 読書行動調査の結果分析と教育的活用

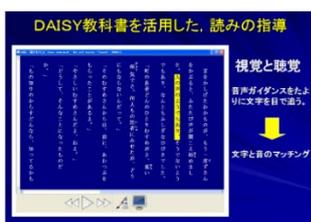
調査結果を分析し、職員研修で説明した。学習面で困難さを抱えている児童の中には「読み」と「読解」に課題のある場合が多い。今回の調査を通して、読みや読解に課題のある児童の視線追跡から、客観的に困難さの一面を把握することができ、先生方から今後の指導に役立つデータであるとのコメントをいただいた。

③ 読書困難児への指導法

読み書き障害児が多数いることから、具体的な指導法に関する助言を行った。

・DAISY教科書による指導（パソコン活用）

教科書をデジタル形式で読み上げるツールを活用することで、読みの流暢性が改善する児童がいて有効な支援策として定着した。



・読み上げ教科書の活用

茨城大学工学部の研究者との共同研究として通常の教科書と同様のものに、二次元コードを装置した教科書を用いた。これに読み上げペンで教科書を示すと一文だけ音声化されるツールを用いて、通常の授業でも活用できるようにした。今までは、授業の中では読みに困難な児童も教科書を自由に活用でき、授

(3) 須賀川小学校と高齢者を含む地域とのサポート体制についての調査

① 「ふるさと学校運動」推進計画

少子高齢化が進んでいる須賀川地区では、ふるさとのよさを見直し体験することで感じ、地域のよさに学び、地域に貢献できる子どもを育成することを目標として掲げ、1年間を通して「ふるさと学校運動」を実践している。

② 事業計画：「ふるさと学校」活動計画

4月：須賀川上組お祭（子どもたちによる花車引き回し） 須賀川上組花車保存会

5月：運動会（地域との合同種目）

6月：ふれあい広場① 「楽しく遊ぼう」

須賀川地区生涯学習推進協議会

6月：寿大学との交流

（花苗植え活動）

須賀川地区寿大学



7月：お能を知る会

7月：ふれあい広場②

「石に絵を描こう」

8月：ふれあい広場③

「宿題頑張ろう」

須賀川地区生涯学習推進協議会



8月：小・中親子廃品回収(地域ボランティア募る)

須賀川小・中学校

8月：5・6年 雲巖寺宿泊 須賀川小・雲巖寺

9月：ふれあい広場④「おじいちゃんおばあちゃんと一緒に」 須賀川地区生涯学習推進協議会

10月：ふれあい広場⑤「雲巖寺散策」

11月：尺八・琵琶コンサート（雲岩寺）



11月：あづまっぺ収穫祭（児童が販売協力）

- 須賀川地区生涯学習推進協議会
- 11月：ふれあい広場⑥「干し柿作り」
須賀川地区生涯学習推進協議会
- 12月：ふれあい広場⑦「クリスマス会」
須賀川地区生涯学習推進協議会
- 12月：ひなたぼっこの交流
ほほえみセンター
- 12月：寿大学との交流「電子レンジの不思議」
須賀川地区寿大学
- 1月：ふれあい広場⑧「ジャムを作ろう」
須賀川地区生涯学習推進協議会
- 2月：ふれあい広場⑨「調理してお昼を食べよう」 須賀川地区生涯学習推進協議会

4. 事業成果

(1) 発達障害児の早期発見及び専門的支援

ア、心理検査及び読み書きのアセスメントを実施したことで発達障害及びLD児の早期発見につながり、具体的な支援に役立った。

イ、DAISY教科書による指導（パソコン活用）や読み上げ教科書の活用により、個のニーズに応じた具体的支援の有効活用がなされるようになった。

ウ、校内研修会において実施した「WISC-IV心理検査の解釈と教育的支援」について助言したことで、教育的理解が深まり教師としての資質向上につながった。

エ、へき地における専門的支援の有効性を理解できた教師が増えたことで、発達障害児への指導に自信を持って取り組めるようになった。

(2) 須賀川小学校と高齢者を含む地域とのサポート体制

「ふるさと学校運動」を通して地域で行う活動や行事に参加することで、子どもたちと地域の方々や高齢者との交流が促進され、次のような子どもの成長につながっている。

- ・学校教育ではできない豊富な体験活動ができる。
- ・地域の方々や高齢者と親しくなり、地域を構成するの一員としての自覚がうまれる。

- ・地域の方々との知り合いになり、話ができる。
このことを通して子どもたちのコミュニケーション能力が育成される。
- ・体験したことまとめたり発表したりすることで、思考力・判断力・表現力の育成に役立っている。
- ・ふるさとの良さが分かり、以下のような「ふるさと力」が育成される。
ア、ふるさとが好きになる。
イ、将来、ふるさとで生きていこうとする気持ちが生まれる。
ウ、歴史や伝統を大切なものに思う心情が育成される。
エ、先人の知恵を自分の生活に活かそうとする。
オ、自分を支えてくれる人がいることに気付く。
カ、テストの結果だけではない、沢山の経験を財産にして自分の「夢」を描ける。
キ、コミュニケーション力（話し合いを通してより良いものにする力）が付く。

5. 今後の展望

今回の研究は、大田原市のへき地複式校の中でも地域と一体となった教育活動を実践している須賀川小学校を対象としたが、栃木県内には、こうした学校が数多く存在する。また、近年は統廃合が急速に進んでいて、へき地複式校の抱える課題はさらに深まっている。

しかし、へき地の伝統文化を次世代に継承する活動は極めて重要であり、地域を愛しつづける子どもの育成は、学校の教育活動としての意味からもさらに深まってきている。

今回は、那須地区のみの研究になったが、今後こうした研究が継続し、広まっていくことを期待したい。